



「天職」と、胸が張れる日

北海道技術士センター 会長
技術士（建設部門）

伊藤 昌勝

岩手出身の友人に、映画「壬生義士伝」を薦められました。「南部人」の生き様が分かって貰えるはずです、との事。機会を探していたところ、知人からDVDがある、ついでに「たそがれ清兵衛」もどうぞと言うことで、仕入れたばかりのプラズマ画面で鑑賞した次第。どちらも幕末の下級武士の生き方が主題です。原典は小説ですから史実ではありませんが、時代背景はそれなりに反映されていると思われま

貧しい中でも教育

壬生義士氏は、あまりの貧しきで口減らしにと入水する妻を抱き上げ、金のために決断して、新撰組に入ります。吝嗇者（ケチ男）と軽蔑されながらも故郷に送金を続けます。たそがれ氏は家庭の事情から、仕事が終わった黄昏時、飲み会も断って毎日判で押したように帰宅を急ぎます。毎朝、二人の娘は風呂敷包みを持って、今の小学生のように塾へ出かけます。夕時、これからは女も学問が要ると教えられたと、内職を手伝いながら論語の暗誦をします。東北の小藩（山形県内）とはいえ教育システムが整っていたことが覗えます。

主役のサムライは、二人とも今で言う中堅の地方公務員でしょう。けっして低くない身分でありながらも、明日の米も不確かな極貧振りです。たそがれ氏が釣りをする川には、餓死した百姓達の死体が流れて行きます。人々は手を合わせるだけで騒ぎにもなりません。ほんの百数十年前の東北。その貧しさが如実に伝わって来ます。そして、それは平均的な日本の地方の姿であったと思われま

孔・孟に尽きる人生学

何れの映画も、イザという時の身の処し方がテーマですが、心髄に染み込んでいるサムライ精神が無意識のうちに出てくる訳です。これは、特別な教育と言うより、生まれ育った社会全体に漲っている伝統文化のなせるものでしょう。友人が「南部人」と言った意味は、これは何もサムライばかりではないと言う事だと理解しております。

人生学は孔子・孟子に尽きると言われます。つまり、人間の処し方は2500年前に結論済みと言う事ですが、幕末には童女でも論語を誦んじ、血肉にしていた訳です。我々もその微かな残り香の中におります。いい年をして、技術者倫理などと言われて違和感を覚えるのはそのためでしょう。映画に感動するセンサーが生きている間に、この教育システムを取り戻したいものです。

天職

サムライ層でも極貧が珍しくもなかった日本が、百数十年で経済大国になれたのは、やはりレベルの高い人材でしょう。北朝鮮のインチキを破ったDNA鑑定と同時に、中学生の学力低下が報道されました。それ以上に、政・官・財エリートのモラルの低下に嫌気がさします。伝統文化に根ざした教育が喫緊の課題に思われます。

「天職」という言葉があります。これには、自らの仕事に対する誇りと満足が感じ取れます。サムライ精神と似てなくもありません。生半に言えるものではありませんが、技術に生きる者として、「天職」と胸が張れる日を期したいものです。